



### 支部活動初の講演会

米沢支部の講演活動としては、初の事業として、平成19年9月8日(土)東京第一ホテル米沢で開催された。

講師は日本政策投資銀行東北支店長の渡部速夫氏。「東北経済の活性化施策」と題し、聴講者80名であった。講演終了後は講師を囲んで、いも煮会を開催した。なお、講演会に先立って新理事、評議員の合同会議を開催、今年度から総務部、産業部が新設され、5部会の構成員と事業活動が承認された。



米沢有為会  
米沢支部だより

第 16 号  
平成20年 2月 1日  
発行 者  
社米沢有為会米沢支部  
支部長 安部三十郎  
米沢市金池5-2-25  
☎ 0238-22-5111

### さあ！ 桐町復活！！ 『Z隊』 出動

プロジェクトZ隊長 加地 浩 昭



「あら町を昔の様に復活させよう」今から五年前の事でした。それまでも、さまざまな町づくりの会議、セミナー、視察に参加させて頂きましたが、成功事例を見ますと、町並みや町の規模そして町を取り巻く環境(国道二八七)などの違いで、桐町を復活・再生させるにはハードの整備しかないのか？と思っておりました。しかしハード整備には莫大な資金が必要で、それ以上に整備中の客離れが懸念されます。そこで、有志三人で、町づくり「プロジェクトZ隊」を結成し、出来る事からやるうと言う事で、今の町並みを生かして出来る事、①戎市の再現②統一暖簾③歩道の整備の三点に絞り、企画・立案・コンセンサス・資金調達・そして桐町再生の実現へと前進する事にしました。

①は商店街に面する国道並びに市道を約五〇〇m通行止めにし、1坪テントを一〇〇張り出店し、大テント市を開催し昭和の賑わいを取り戻す事業で、町内のコンセンサス(合意)と警察との折衝が大変でした。しかし粘り強く協議を続けるうち、県警からの規制緩和の話があり、二〇〇四年九・十月二回のブレ開催を経て二〇〇五年は五月から十一月まで合計七回二〇〇六年は年五回、そして今年も五、六、九、十、十一月の年五回を開催できる運びとなりました。

②も各商店をイメージしてもらえらえるイラスト入りのオレンジのれんを作り、戎市開催一週間前に掲げて、週末(日)には「戎市」開催のサインに定着しました。③は十数年、フラワーポットで花いっぱい運動をやって来ましたが、上杉鷹山公が奨励した「ウコギ」を点在させ、米沢らしさを出しながら景観アップを図りました。

一昨年あたりから、市内外の幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、そして一般のサークルの方々の発表の場としてのイベント参加が多くなり、集客数も一段と厚みを増し、市民参加型が色濃くなりました。

また、地元、北部小学校では、さまざまな学年に応じ、町づくりへの関わりや商店街見学など、授業にも取り入れてもらい、子供の目線から見た「桐町」にも気づかされ、これからのZ隊並び各商店の進むべき方向性も開けた気がします。

この三つの事業を軸に行政主導ではやり得ない、俊敏かつ柔軟な対処をし、イベントに終わらせず、町内外に波及する、楽しい【経済効果がある戎市】にして行き、米沢の情報発信基地「桐町」になって行きたいと思えます。

最後に、私たちの目指すマチは街では無く、居住をしながら商いの出来る「町」にこだわりたいと思います。  
今後とも、「ドラマチック戎市」に、ご理解とご協力のほどお願い致します。

米沢有為会米沢支部だより

# 会員倍增キャンペーン

(注)米沢有為会は二年後に創設一〇〇周年を迎えます。これを契機に会員倍增キャンペーンを実施します。会員みんなが一人一名ずつの会員募集に協力くださるようお願いいたします。

会員の皆さまには、歴史と伝統ある本会の人材育成事業を誇りとし、今後も継続されるよう一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

現在、会員は全国で一〇〇〇名ほどで、米沢支部会員は五八一名です。本会の継続を図るには常時、会員の勧誘が欠かせません。支部活動も、情報提供や会員相互交流を図るなど、新たな視点から充実を図っています。

ご存知のように、本会は郷土米沢地方から国家社会に有為な人材を育てる会として創設されました。奨学金貸与事業や興譲館寮を東京、仙台等に設置して青少年の健全育成を図り、現在は東京、仙台で興譲館寮を運営、平成四年には民法学者我妻榮先生の生家を記念館として管理運営しています。

現在、会員は全国で一〇〇〇名ほどで、米沢支部会員は五八一名です。本会の継続を図るには常時、会員の勧誘が欠かせません。支部活動も、情報提供や会員相互交流を図るなど、新たな視点から充実を図っています。

特別会員 年額 七、〇〇〇円  
普通会員 年額 三、〇〇〇円  
賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円  
米沢支部役員一同

## 新しく会員になられた方々 (平成十九年四月～十二月)

情野井 憲 仁 治  
酒藤 幸 仁  
遠藤 敏 幸  
戸田 助 男  
江川 栄 明  
板垣 正 仁  
岡部 恒 夫  
今野 弘 正  
情野 恒 夫  
安野 恒 夫  
近藤 恒 夫  
加藤 恒 夫

廣居 敏 夫  
鉄砲屋町内会  
片倉 敬 輔  
佐藤 信 七  
井上 亮 介  
工藤 敏 美  
青木 敏 介  
齋藤 忠 彦  
庄司 芳 彦  
渋谷 貞 彦  
阿部 貞 彦  
淀川 貞 彦  
柴田 貞 彦

高橋 義 和  
海老名 杉 義  
小橋 文 政  
高橋 文 政  
奥村 美 昭  
本間 智 秋  
細谷 正 弘  
小野 秀 一  
菅野 智 一  
近藤 智 一  
小澤 智 一  
川島 智 一  
加藤 智 一

高橋 義 和  
横山 創 信  
市村 隆 敏  
遠藤 誠 一  
加藤 誠 一  
木村 敏 三  
清水 敏 三  
進藤 敏 三  
豊田 敏 三  
古川 敏 三  
宮内 敏 三  
山田 敏 三  
永田 敏 三  
小久保 廣 信  
高橋 創 信  
横山 隆 敏  
市村 誠 一  
遠藤 誠 一  
加藤 誠 一  
木村 敏 三  
清水 敏 三  
進藤 敏 三  
豊田 敏 三  
古川 敏 三  
宮内 敏 三  
山田 敏 三  
永田 敏 三  
小久保 廣 信

(敬称略)

## ～ 活躍する会員紹介 ～ ④

遠

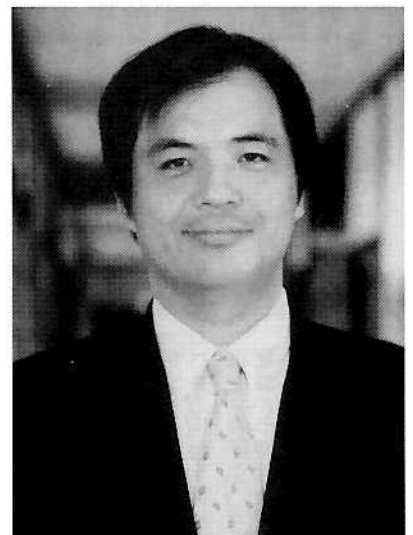
藤

英

### 直江兼統の素顔 著者 遠藤 英

「天地人が2009年NHK大河ドラマに決定を見た今、米沢はどこに行っても直江兼統ブーム。そこにタイミングよく一冊の小冊子「直江兼統の素顔」が出版された。著者は遠藤 英（九里学園教諭）さんである。九里学園高校に籍を置かれる著者は、高校生でもわかる兼統の人柄を書きたい、との思いのもとにこの作品を仕上げたといわれる。もう一つ著者が狙いとしたことは、米沢での兼統の活躍に光を当てることであった。今までも兼統について書かれた本は多種あるが、それらは、武将としての彼が強調され、彼の人生が成熟する米沢時代が見えにくいとの思いからであった。

東北大学の史学科で学ばれた著者は、常に学びの姿勢旺盛で、特に郷土を愛するおもしろい。九里学園高校の一般市民対象として実施されている土曜講座の「地域巡検」の講師としても参加者から好評をえているばかりでなく、大学時代に出会った「中国武術」の講師としても知られている。そのような著者が、長く温めていたテーマのひとつが、城下町米沢の基礎を築いた直江兼統であった。[A 5判 55頁 定価500円] (遠藤岩根・記)



(遠藤岩根・記)

## NHK大河ドラマで「直江兼統」が主役に

米沢支部副支部長 曾根伸良

上杉の知将「直江兼統」が、二十一年のNHK大河ドラマで取り上げられることになりました。

米沢市と山形県では昨年十月、「天地人推進委員会」を立ち上げ、放映に向け様々なPRや市民講座を開催しています。そこで、今号と次号で「直江兼統」を顕彰していきます。

## 直江兼統を名将たらしめた二人

直江兼統は名将と言われるすぐれた人物でしたが、決して彼単独の力であれだけの事跡を挙げ得たわけではありません。彼を歴史の舞台に押し上げてくれた人、彼を陰で支えてくれた人は少なくとも二人います。一人は兼統の主君上杉景勝、もう一人は兼統の夫人お船の方です。

## 直江兼統の主君上杉景勝

直江兼統は陪臣（大名の家臣）です。陪臣の身でありながら、あの戦乱の世に、豊臣秀吉をはじめ

多くの大名に一目も二目も置かれる人物として、上杉家のために数々の事跡を成し遂げ得たのは、主君上杉景勝が彼に終始絶大な信頼を寄せ、彼の能力、識見を高く

評価して、存分に力を発揮させてくれたからに外なりません。景勝は地味な人柄で、父謙信（景勝は謙信の養子）のようなカリスマ性もなく、大衆受けのする華やかさもありませんでした。しかし、兼統との関係だけを考えても、いかに懐が深く、度量が大きかったかがわかるというものです。

兼統は、上田の坂戸城（景勝の実父長尾政景の居城）に仕えていた樋口兼豊という人の子息で、十六歳の時に景勝の側近く仕えまし



実像に近い？

紙本淡彩墨画・米沢市上杉博物館

上半身のみで首を傾けず、束帯に直江家の家紋が描かれるなどの違いはありますが、杓を持った衣冠姿である点など、『集古十種』に収められた直江兼統の肖像画を手本にして描かれたとみられます。制作に関する具体的な情報は不明です。

（上杉博物館図録より）

た。景勝は兼統の将来大器となる人物であることを見抜き、次第に重用していききました。そして、謙信以来の名家であり、代々奉行（執政のこと）の家柄である直江家の当主信綱が事故で死んだ時、景勝は兼統をその後嗣として入れ、名実ともに景勝の股肱の臣として、そして上杉家の宰相として、内外の諸問題を取り仕切らせたのです。

それでは、景勝という人は何でも兼統に任せて自分は何もしな

かったのか。決してそんなことはありません。彼が二三歳の時父謙信が急死するや、直ちにライバル景虎の機先を制して「御館の乱」を勝ち抜き、謙信後継者の座を自らの手でもぎ取ったことを始め、「本能寺の変」での織田信長の死後、慎重に時勢を読み取って豊臣秀吉の麾下に入り、越後、庄内、佐渡、信濃四郡の統一を成し遂げたこと。秀吉亡き後、

露骨に天下を狙う徳川家康の横暴に屈せず、断然戦いを挑もうとしたことなど、重要な局面での決定はすべて、一国の領主たる景勝自らの判断と決断によるものです。上杉謙信と上杉景勝のすぐれた研究者である新潟大学の矢田俊文教授は、「謙信は地方の権力者ではあったが、その子景勝は天下の政治を動かす人物であった。」（『定本上杉謙信』）と言っています。

お船の方については次号に記載します。

